南朝のさとから

全国南朝の歴史資産等所在市町村活性化協議会
会報誌 No.2

協議会HP

福岡県八女市　良成親王お手植えと伝わる「黒木大フジ」

熊本県菊池市「菊池武光公像」

～本協議会について～

南北朝時代に、宮方あるいは南朝と呼ばれた勢力の拠点となった市町村が、歴史資源の保存と活性化を目指して全国南朝の歴史資産等所在市町村活性化協議会を結成しています。現在、関東から九州まで9市町村が加盟しています。

～協議会の活動について～

奈良県吉野町において、7月3日に「南朝のさとから～いまに受け継ぐ南朝の歴史資産」と題したシンポジウムと総会を開催し、多数の方に参加いただきました。

今年度の会報誌は、九州における南北朝時代をテーマに発行します。

奈良県吉野町中央公民館で開催したシンポジウム

パネラー
- 中　淳志 氏（京都府笠置町長）
- 加島公信 氏（吉野町如意輪寺住職）
- 五條元滋 氏（八女市五條家当主）

コーディネーター
- 中東洋行 氏（吉野町役場）

～九州における南北朝時代～

鎌倉幕府の滅亡まで

１１８５年～１３３３年

鎌倉時代には朝廷と鎌倉幕府があり、それぞれで統治していました。九州には少弐氏・大友氏・島津氏に代表される御家人と呼ばれた将軍の家来が派遣され、領地の取り締まりや税の取り立てを行う守護や地頭職を務めています。菊池氏も有力御家人でした。

元寇と呼ばれるモンゴル帝国の来襲では、絵巻物「蒙古襲来絵詞」での菊池武房のように九州の御家人も戦に動員されます。その後は出先機関である鎮西探題が博多に設置され、幕府の影響力が強くなります。

１３３１年、天皇中心の政治を目指した後醍醐天皇は鎌倉幕府の討伐を計画しますが、事前に発覚して隠岐に配流されます（元弘の変）。子の護良親王（大塔宮）が倒幕を呼びかける一方、隠岐を脱出した後醍醐天皇は倒幕の綸旨（天皇の命令書）を全国に発出しました。

１３３３年3月、菊池武時は少弐氏と大友氏に鎮西探題討伐を呼びかけたものの動かなかったため、阿蘇惟直と探題を襲撃しましたが敗死します。

4月には足利尊氏から討幕を呼びかける密書が阿蘇氏らに発出されます。5月22日に鎌倉幕府が、25日には少弐・大友・島津氏により鎮西探題が陥落しました。

鎮西探題（鎌倉幕府の出先機関）の攻防
菊池武時は敗死したが、その後の戦いで探題陥落。
(勝) 大友貞宗・少弐貞経 × (負) 北条英時（鎮西探題）
島津貞久

九州南北朝人物伝（南朝方）

○懐良親王

後醍醐天皇の皇子。征西将軍として、菊池氏ら九州南朝勢力の旗頭として九州入りしました。皇族ながらも戦場で北朝方の少弐・一色氏らと激闘を繰り広げ、大保原の戦いでは矢傷を負ったといわれています。全国的に退勢であった南朝勢力の中、一時は太宰府に、征西府を打ち立てるほどの勢力を誇りました。太宰府撤退後は八女に隠遁したと伝えらえます

○良成親王

懐良親王の甥。懐良親王の太宰府撤退後に、征西将軍職を譲られました。菊池武朝らとともに、衰えていく九州南朝勢力の中心人物として戦いつづけました。南北朝合一後は五條氏を頼って矢部に居を移しますが、南朝の元号を使いつづけ、大杣で薨去しました。

○五條頼元

懐良親王とともに吉野から下向し、側近として息子良氏ともども、九州南朝勢力を支えつづけました。八女市矢部に隠遁し、子孫が代々守った金烏の御旗、頼元らがのこした文書類（五条家文書）は文化財として大変貴重なものです。

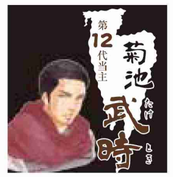
金烏（きんう）の御旗（みはた）

五条家文書（ごじょうけもんじょ）

菊池氏系図（当主中心の簡略版）

⑩武房－⑪時隆
- ⑫武時
  - ⑬武重
  - 武澄
  - 武敏
  - ⑭武士
  - ⑮武光－⑯武政－⑰武朝

○菊池武時



鎌倉期末期に鎮西探題襲撃を図りましたが、あえなく討死をしました。蜂起が探題方に察せられていても、嫡男武重に後事を託して死を覚悟して討ち入ったと伝えられています。その蜂起は建武の新政時に楠木正成に高く評価されました。

○菊池武重

武時の嫡子。箱根竹之下の戦いで、新田勢として足利軍と戦った際、即席の槍を使った集団戦法を考案したといわれ、これが後の菊池千本槍となったと伝えられます。後醍醐天皇に仕え、建武新政崩壊後、北朝勢力が強かった九州において、南朝勢力として戦いました。

○菊池武光

武重の弟で、十五代の惣領となりました。北朝勢力が優勢な状況で、懐良親王を旗頭として九州中を駆けめぐり、戦いに明け暮れました。少弐・一色・大友氏ら北朝方の有力者を討ち破る武功を重ね、十数年にわたって太宰府を抑えて、九州南朝勢力の中心として活躍しました。

○菊池武朝

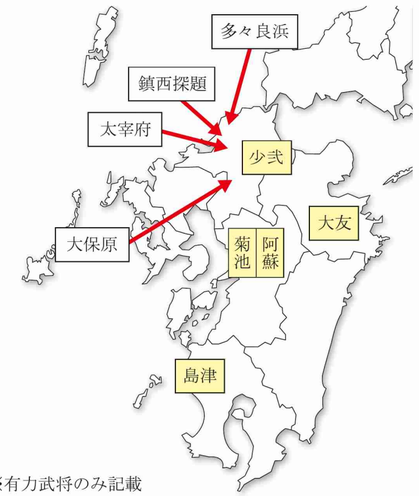
武光の孫。征西府が太宰府から撤退した後、わずか十二歳で惣領となると、後征西将軍良成親王を奉じて一族の運命を背負い、鎮西管領今川了俊と戦いつづけました。南北朝合一後は、肥後守護として本領安堵されています。

○阿蘇惟澄

阿蘇大宮司家は、家中で南朝と北朝とに支持が分かれ、惣領惟時の娘婿惟澄は南朝方として戦いました。惟澄は武光の舅にあたり、多くの戦場で馬首をならべて戦いました。阿蘇家にのこる文書類（阿蘇家文書）は当時の様子を伝える貴重な史料です。

菊地の松囃子（菊池市）

良成親王を偲ぶ大杣公園祭（八女市）



※有力武将のみ記載

建武の新政、多々良浜の戦いから南北朝分裂まで

1333年～1336年

菊池氏は初めて肥後守に任じられました。

新政が崩壊したのは、1335年に北条時行が鎌倉を占拠した中先代の乱がきっかけです。後醍醐天皇の許可を得ずに時行を破った尊氏は、その後も許可なく恩賞を与えて鎌倉に留まり朝敵となります。討伐軍の新田義貞を破った尊氏は京を攻めますが、北畠顕家、楠木正成、新田義貞の連合軍に敗れ、西国に撤退しました。途中、光厳上皇から新田義貞を討伐する命令を受け、朝敵となることを避けた尊氏は、体制立て直しのため九州に向かいます。

少弐頼尚が尊氏を迎える間、戦の準備をしていた少弐貞経は、菊池武敏と阿蘇惟直の攻撃を受け自害します。1336年の多々良浜の戦いでは武敏率いる後醍醐天皇方と尊氏方が戦うものの、天皇方に裏切りが出て、圧倒的に不利だった尊氏方が勝利しました。

尊氏は手薄になる九州での戦に備えて一色道猷（鎮西管領）らを残し、少弐・宇都宮・大友氏ら九州守護と東上、湊川の戦い（兵庫県）で新田義貞と楠木正成（戦死）を破り京を制します。その後は北朝を擁立し、室町幕府を開きました。後醍醐天皇は吉野に朝廷（南朝）を開いたため、朝廷は南北に分裂します。

多々良浜の戦い
㊗ 足利尊氏・大友氏　×　㊘ 菊池武敏
少弐頼尚・島津貞久　　阿蘇惟直・惟成（自刃）
劣勢の足利勢が勝利し、九州で勢力を回復する

南北朝の分裂
（南朝）後醍醐天皇　×　（北朝）光明天皇・室町幕府

征西大将軍懐良親王の派遣から菊池での成人まで

1336年～1348年

1338年、尊氏が征夷大将軍に任じられる一方、有力な武将であった新田義貞と北畠顕家を失った後醍醐天皇は、天皇の子どもである親王を地方に派遣し、南朝勢力の拡大を図ります。

九州に派遣されたのは征西大将軍懐良親王です。幼少であった親王の補佐役には五條頼元が付きますが、従者は12人だけでした。親王には今も五條家に伝わる八幡大菩薩旗（金烏の御旗）と綸旨（天皇の命令書）によって、本来は南朝天皇だけが持つ恩賞と懲罰についての裁量権が与えられており、速やかに恩賞や懲罰を行うことができました。

翌年、伊予忽那島（松山市）に居た親王に、死去前日の日付で後醍醐天皇から後村上天皇への譲位を伝える綸旨が届きます（五条家文書）。1342年に谷山城（鹿児島市）に入った親王一行は、当初の目的であった九州入りを果たしました。

何度も南朝方に勧誘した阿蘇惟時は態度を明らかにしなかったため、1348年には肥後の菊池武光のもとへ身を寄せ、以後13年間滞在します。同年菊池で成人した親王は、五條頼元の補佐と菊池武光の軍事力を得て征西府の活動を本格化させ、北進を開始します。

観応の擾乱から征西府の全盛期まで

1348年～1372年

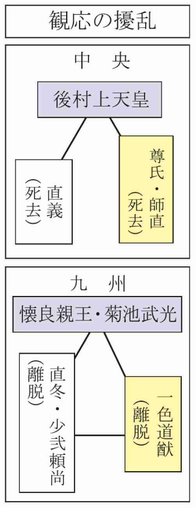
1348年、中央では楠木正行が四条畷の戦い（大阪府）で尊氏の執事高師直に敗北。吉野を奪われた後村上天皇は賀名生（あのう）（奈良県五條市）に移ります。

翌年、北朝方では高師直と尊氏の弟直義による主導権争いが発生、直義が失脚した後は観応の擾乱に発展します。失脚していた直義は南朝に突然降伏し、尊氏と師直軍を破ります（師直は後に殺害される）。尊氏と直義は一時は和議を結んだものの対立したため、今度は尊氏が南朝と一時講和（正平の一統）して直義を降伏させました（直義は後に死去）。

中央では尊氏の影響が強まる結果になった観応の擾乱ですが、直義の養子である直冬（尊氏の実子）が肥後（熊本）に来たことで九州の情勢も変化します。

九州北部も北朝方が分裂し、幕府方の一色氏と足利直冬・少弐方で争ったことが南朝方に有利に働きました。正平の一統では、討伐命令が出ていた直冬に対し、南朝方と一色氏が共同作戦を展開して筑後に出陣します。1352年に九州を脱した直冬は、直義死去後に後ろ盾を無くし、翌年には南朝に降りました。一色氏に包囲された少弐氏は、菊池武光に救援を求めます。

こうして起きた針摺原（福岡県筑紫野市）の戦いで菊池武光軍は一色軍に大勝したため、その後一色氏も九州を離脱しました。全国では北朝方が優勢である一方、九州では南朝方が優勢になります。



その後大友氏、少弐氏が幕府方になったため、1359年8月6日、大保原（福岡県小郡市）の戦いが起こりました。日本三大合戦にも数えられる激しい戦いで、夜襲をかけた木屋行実、先鋒となった菊池武政、何より菊池武光の活躍があって南朝方が勝利します。

1361年には太宰府に征西府を開き、12年間維持するなど、九州の南朝方は全盛期を迎えました。後醍醐天皇の孫で後征西将軍とされる良成親王はこの時期に征西府に派遣されたと考えられています。

大保原合戦（筑後川の戦い）
㊗ 懐良親王・公家　×　㊘ 少弐頼尚
菊池武光・新田一族　　大友氏時
懐良親王は傷を負うが菊池武光の奮戦により勝利
木屋家文書（八女市）には貴重な南朝方の軍忠状がある

西暦	中央	西暦	九州
1333	鎌倉幕府滅亡、建武の新政	1333	鎮西探題陥落
1335	中先代の乱		
1336	建武式目		
1338	石津、藤島の戦い	1336	多々良浜の戦い
	足利尊氏将軍へ		懐良親王征西将軍として九州に向け出発
1339	後醍醐天皇崩御	1339	忽那島で綸旨を受領
		1342	懐良親王九州入り
1348	四条畷の戦い	1348	懐良親王菊池入り
1349	足利直義失脚、足利直冬は九州へ	1349	直冬、高師直打倒を訴え勢力拡大
1350	観応の擾乱、直義は南朝に降参	1350	少弐頼尚、直冬方へ
1351	高師直殺害、尊氏南朝講和、正平の一統	1351	南朝・一色氏で共同作戦、親王筑後進出
1352	直義降伏、一統の終り	1352	直冬が九州を出る
1353	直義死去、直冬が南朝に降参	1353	針摺原の戦い
1355	直冬、京攻め後敗走	1355	一色道猷は九州を出る
1358	尊氏死去、義詮将軍へ		
		1359	大保原の戦い
		1361	懐良親王太宰府進出
		1362	長者原の戦い
1367	義詮死去、家督は義満	1367	五條頼元死去
1368	後村上天皇崩御	1368	明国、朝貢を求める
1369	足利義満将軍へ、後征西将軍宮四国大将へ	1369	懐良親王方は明国使者を斬る
1370	今川了俊鎮西管領へ	1370	明国へ朝貢を決める
		1372	太宰府陥落、高良山へ
		1373	菊池武光死去
		1374	両親王は菊池へ、征西将軍の交代
		1375	水島の変
		1377	千布・蜷打、臼間野・大水山関の戦い
			懐良親王御在所黒木
		1381	菊池隈府城陥落
		1383	懐良親王薨去
		1391	八代陥落
1392	南北朝の合一		
		1395	後征西将軍、御在所矢部大杣

1368年には中国に建国された明の皇帝から倭寇の取締まりと貢物を求める使者が懐良親王に派遣され、「日本国王良懐」と認められます。（使者は幕府が捕縛）

太宰府陥落から南北朝合一、両親王の薨去まで

1372年～

足利義満から鎮西管領に任命された今川了俊は、1372年に太宰府を攻略します。懐良親王は高良山（福岡県久留米市）に撤退して抵抗しますが、翌年に武光が死去、石垣城、耳納山、黒木城にあった南朝軍も敗れ、2年間留まった高良山を捨て菊池に撤退しました。征西将軍職を良成親王に譲った懐良親王は、五條氏を頼り筑後国に移ります。

1381年菊池氏の拠点隈府城（熊本県菊池市）が陥落、良成親王は金峰山のたけの御所、宇土城（同宇土市）、八代（同八代市）の高田御所を転々として抵抗を続けます。懐良親王は1383年3月27日に薨去されたと伝わります。1391年には八代も陥落、南北朝合一後も南朝の旗印を降ろさなかった良成親王も矢部村（福岡県八女市）で薨去されました。

執筆
本　文　八女市役所文化振興課文化振興係
人物伝　菊池市役所

参考文献
森茂暁「懐良親王」（ミネルヴァ書房2019年）
三浦龍昭「懐良親王、菊池武光」（亀田俊和・生駒孝臣編『南北朝武将列伝南朝編』、戎光祥出版、2021年）
花田卓司「足利直冬」（亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝北朝編』、戎光祥出版、2021年）